

在留外国人の健康維持に必要な災害時の支援

青木健太郎¹⁾, 橋本美香²⁾, 長谷川真紀²⁾, 中野貴司³⁾, 田中孝明³⁾

1) 川崎医科大学医学部医学科第3学年

2) 川崎医科大学語学

3) 川崎医科大学小児科学

(令和元年11月6日受理)

Disaster Assistance for Maintaining Foreign Residents' Health

Kentaro AOKI¹⁾, Mika HASHIMOTO²⁾, Maki HASEGAWA²⁾,
Takashi NAKANO³⁾, Takaaki TANAKA³⁾

1) *Third-year Medical Student, Kawasaki Medical School*

2) *Department of Linguistics, Kawasaki Medical School*

3) *Department of Pediatrics, Kawasaki Medical School*

(Accepted on November 6, 2019)

抄 録

近年、全国各地で自然災害が起こっているが、在留外国人はコミュニケーション・ギャップなどにより、災害弱者になりやすいとされている。しかし、彼らが災害時に居住する地域で心身の健康を維持するために必要な支援について、明らかになっていない。そこで、本研究は、災害時に在留外国人にどのような支援が必要かを明らかにすることを旨とする。まず、岡山県内の在留外国人（国籍別にベトナム27名、インドネシア12名、中国11名、その他34名）を対象に質問紙調査を行った。さらに、質問紙回答者の内3名に対し、半構造化面接による調査を行った。その結果、災害時の物資について、在留外国人特有の要望は認められなかった。しかし、医療サービスへのアクセスに不安を持ち、多言語対応の医療情報などを強く求めていることが明らかになった。また、相談できる病院がないという回答は57.1%にのぼり、災害時の医療支援については70.2%が、災害マニュアルの存在については83.3%が認識していなかった。これらの調査の結果から、医学生が理解しなければならないことが明らかになった。まず、在留外国人には、災害時の支援の情報収集に課題があることである。国際社会における医療の現状と課題の理解は、『医学教育モデル・コア・カリキュラム』の「国際社会への貢献」の項目に示されているものである。次に、災害時に医療サービスを円滑に提供するために、平時から外国人医療について理解しなければならないことである。そのためには、患者の文化的背景を尊重し、異なる言語や価値観に対応した医療を提供するための素養を身に付けることが必要となる。これらを実践するためには、医学部のカリキュラムとして、大学全体で地域の在留外国人の診療や災害時の支援に関する学修を行う必要があると考える。

キーワード：在留外国人, 健康維持, 災害時の支援, 国際社会への貢献

Abstract

Recently, Japan has faced various natural disasters throughout the country, and foreign residents have tended to be vulnerable victims due to factors such as the communication gap. Nevertheless, disaster assistance for maintaining their health at their residential areas has not been adequately discussed. This study aims to determine the assistance needed to maintain foreign residents' health at the time of a disaster. A questionnaire survey was administered to foreign residents in Okayama Prefecture (27 Vietnamese, 12 Indonesians, 11 Chinese, and 34 other nationals), and then semi-structured interviews were conducted with three persons among the above-stated participants. The results showed that foreign residents were concerned about the access to medical services and that they had a strong need for multilingual medical information, whereas no relief supplies needed particularly by foreign residents was identified. It was also revealed that 57.1 percent of the participants did not have any medical institution to consult with during a disaster, 70.2 percent did not have information about disaster-related medical support, and 83.3 percent were not aware of disaster guidelines. These findings suggest two issues that medical students need to be aware of. First, foreign residents have problems in collecting disaster assistance information. We maintain that medical students should understand such situations, as the importance of understanding the current medical situation and issues in the global society are discussed in the section "Contribution to the Global Society" in the Model Core Curriculum for Medical Education in Japan. It is also suggested that medical doctors need to have sufficient knowledge on healthcare for foreigners under any circumstance and need to be able to provide medical services smoothly during a disaster. In order to do so, they should be equipped with an attitude and knowledge for practicing medicine that respects the patients' cultural background and accommodates diverse languages and values. The curriculum for medical education should offer opportunities to learn about community health care including foreign patients and disaster assistance.

Key words: foreign residents, health maintenance, disaster assistance, contribution to the international community

1. 背景

近年、在留外国人が増加している¹⁾。岡山県も例外ではなく、保健医療において多文化共生の視点が重要になりつつある²⁾。また、全国各地で自然災害が起こっているが、在留外国人は、コミュニケーション・ギャップ³⁾などにより、災害弱者になりやすいとされている⁴⁾。しかし、災害時に彼らが心身の健康を維持するために必要な支援については、明らかになっていない。

2. 目的

川崎医科大学は、岡山県倉敷市にある。本研究では、岡山県において、災害時に在留外国人

に対し、どのような支援が必要かを検討した。また、適切な支援を提供するには、医学教育においてどのような取り組みが必要かを明らかにした。

3. 方法

質問紙調査について、岡山県内の在留外国人が所属している倉敷日本語教室、岡山市外国人協議会、総社市役所、岡山大学基幹教育センター、吉備国際大学社会科学部、川崎医科大学語学教室において行い、同意書に署名を得られた人を対象とした。回答を得られたのは84名で、国籍別にベトナム27名、インドネシア12名、中国11名、韓国7名、スリランカ5名、ア

アメリカ3名、カンボジア3名、台湾3名、イギリス2名、オーストラリア2名、タイ1名、ミャンマー1名、トルコ1名、ドイツ1名、フランス1名、ポーランド1名、ナイジェリア1名、ニュージーランド1名、ブラジル1名)である。なお、質問紙調査は日本語、英語、中国語、ベトナム語の質問紙を作成し、使用した。質問紙は、別紙1に示す。

調査対象者の在留年数と、日本語能力については、図1、図2a、図2b、図2cに示した。岡山県の在留年数は、10年以上は8名であったが、半数は1年未満であり、3年未満が76%であった(図1)。また、日本語での聞き取りは約半数が「少し聞き取れる」と答えた(図2a)。日本語での会話についても、「少し話せる」が約半数であった(図2b)。これと連動して、日本語での読み取りについて、少し読み書きができる人が学んでいるであろう初級の漢字(約300字)が読める人が約半数を占めた。また、30%以上の方が、中級以上の漢字(約700字)が読めると答えたことは、特筆すべきである。(図2c)。

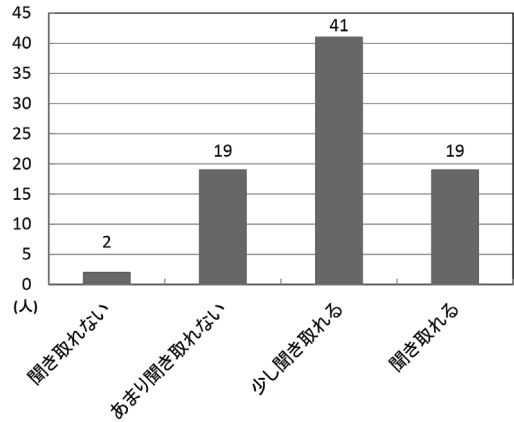


図2a 日本語での聞き取り

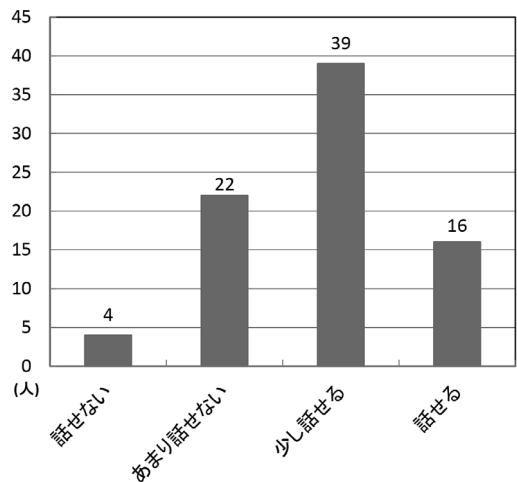


図2b 日本語での会話

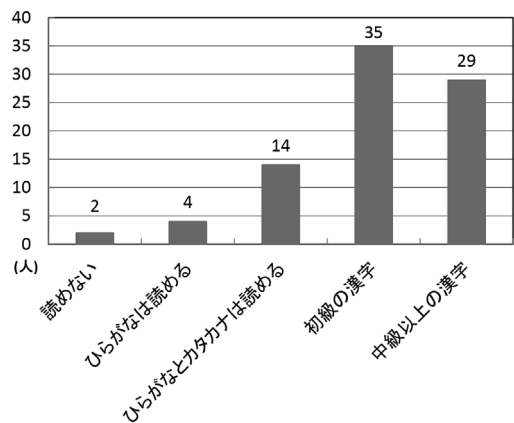


図2c 日本語での読み取り

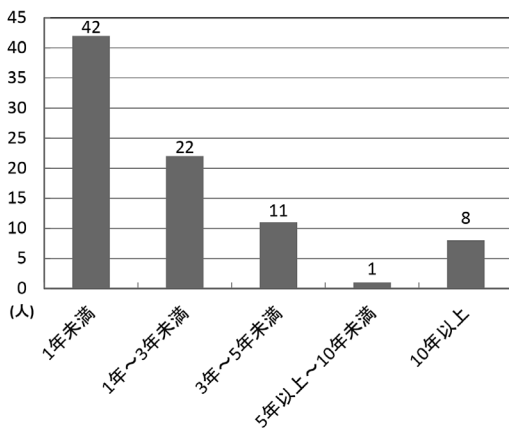


図1 岡山県での在留年数

さらに、質問紙調査結果に関して詳細な情報を得るため、質問紙回答者の内3名(留学生1名, 社会人2名)に対し、半構造化個別面接を行った。インタビュー・ガイドは、別紙2に示す。面接後、本研究に関連する重要な部分を抽出し、コーディングを行った。なお、本研究は、川崎医科大学倫理委員会の承認を得ている(倫理委員会承認番号: 3306)。

4. 結果

1) 災害時の保健医療ニーズ

質問紙と面接により、災害時の保健医療に関して、どのようなものが必要か調査した。この結果、質問紙調査では、「物資の支援(60件: 留学生42名, 社会人18名)」, 「多言語対応の医療情報(38件: 留学生23名, 社会人15名)」, 「災害時の相談先に関する情報(2件: 留学生1名, 社会人1名)」などの回答が主に得られた。「物資の支援」については、「食料(38件)」, 「水(33件)」, 「女性用の衛生用品(16件)」, 「医薬品(15件)」, 「衣料(6件)」などの回答が得られた。「多言語対応の医療情報」に関しては「医療サービスを受けられる場所と支援の種類を多言語で示してほしい」, 「多言語で医療サービスを受けられる医療機関を知りたい」, 「災害による病気についての多言語の情報が必要である」, 「医療情報をやさしい日本語で説明してほしい」などの回答が得られた(表1)。「災害時の相談先に関する情報」については、「各地域で保健医療について相談できる担当者を教えてほしい」, 「保健医療に関して援助してくれる相談先が知りたい」などの回答があった。

面接調査では、「災害時の医療支援に関する情報(3件: 留学生1名, 社会人2名)」が主に挙げられた。具体的には、「外国人が、日本人と同じような情報を得られていない」, 「国や自治体に、多言語で医療支援の情報を発信して

表1 在留外国人が求める多言語対応の医療情報の具体例

母語で受診できる医療機関を含めて、保健医療に関する根本的な情報が必要である。
どこで医療サービスを受けられるか、どんな支援があるかの情報が母国語であると良い。
災害時、医療保健施設が、被災者の診察を優先的に行ってくれるかどうかを母語で知りたい。
どれくらいの被害だったら保健医療サービスを受けられるかなどの情報が母語が必要である。
災害時の保健医療サービスの内容や費用について、母語で提供してほしい。
災害によって引き起こされる病気についての情報を、母語で提供してほしい。
薬を供給してくれる医療機関について、母語の情報が欲しい。
怪我人に対する応急処置について、母語の情報があると良い。
母語で書かれた健康保険証が必要である。
医療に関連した情報を英語で発信してほしい。

ほしい」, 「被災者が、保険証がなくても保険医療を受けられるという情報を、多言語で外国人に伝えてほしい」との回答が得られた。

2) 災害時の備え

質問紙により、次の調査を実施した。災害時に相談できる病院があるかという質問に対し、36人(42.9%)があると回答し、48人(57.1%)がないと回答した(図3a)。保健医療面で受けられる支援について、25人(29.8%)が知っているとして回答し、59人(70.2%)が知らないとして回答した(図3b)。岡山県の災害マニュアルについて、14人(16.7%)が知っているとして回答し、70人(83.3%)が知らないとして回答した

(図3c)。

次に、質問紙及び面接により、災害時に保健医療面で不安に思うことは何かを調査した。その結果、質問紙調査では「言葉の壁（8件：留学生5名，社会人3名）」、「保健医療サービスへのアクセスの欠如（9件：留学生8名，社会人1名）」などが挙げられた。「言葉の壁」による主な問題は「日本語の緊急メッセージやアナウンスが分からない」、「自分の母語で受けられる医療サービスがない」であった。「保健医療サービスへのアクセスの欠如」については、「医療機関の場所が分からない」、「医療機関について相談できる人がいない」、「災害時に外国人が受けられる保健医療サービスについて知らない」などの回答があった（表2）。

面接調査では、「保健医療に関する情報の欠如（3件：留学生1名，社会人2名）」、「医療費に関する不安（1件：留学生1名）」などが挙げられた。「保健医療に関する情報の欠如」については、「日本語以外での情報が届かない」、「多くの在留外国人は医療費について心配しているが、それに関する情報がない」という回答が得られた。「医療費に関する不安」については、「自分が持っているお金と国民保険で治療費を払うことができるかどうか不安である」、「国や自治体が治療費を補助してくれるかわからない」という回答があった。

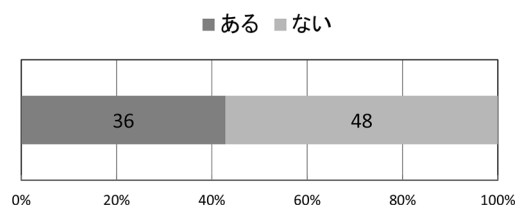


図3a 災害時に相談できる病院

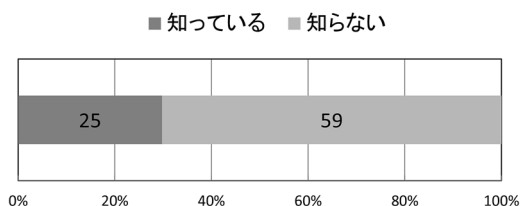


図3b 保健医療面で受けられる支援について

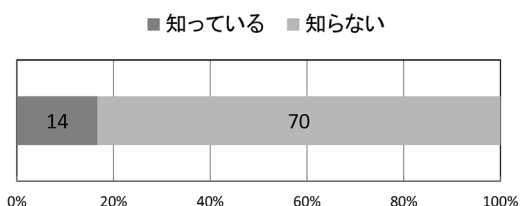


図3c 岡山県の災害マニュアルについて

表2 在留外国人が災害時に保健医療面で不安に思うことの実例

言葉の壁	緊急メッセージやアナウンスは、アプリで日本語に翻訳できない。例えば、場所の名前は読みづらい。
	自分の母語で書かれた医療情報がない。
	日本語が分からないことが最も不安である。
保健医療サービスへのアクセスの欠如	日本語が分からない場合に、どうすれば良いのか知らない。
	医療機関がどこにあるかわからない。
	災害時、怪我人が出た場合、救急車がすぐ来られるのか、適切な治療を受けられるのかが不安である。
	どこに行けば良いかや、誰に話せば良いかが分からない。また、医療が受けられなかったり、費用が高かったりするのではないかと不安。
	保健医療について、外国人が災害にあった時、どのように対応してくれるかわからない。

5. 考察

調査結果より、在留外国人が必要としている物資は日本人と同様であり、一方で、災害時には、日本語以外の医療情報が不足していることが分かった。

在留外国人の医療情報の不足を解消するためには、まず、多言語による医療情報の提供が必要である。さらに、普段から医療従事者が在留外国人と交流を持ち、医療情報を共有する必要がある。それにより、在留外国人の情報へのアクセスを高め、災害時に円滑に医療サービスを提供することが重要である。また、在留外国人が在留資格により、受けられる医療・福祉制度が異なっている⁵⁾。そのため、在留資格により受けられる医療・福祉制度が異なっていることを理解する必要があると考える。

以上の調査の結果から、二つのことが明らかになった。一つは、在留外国人には、災害時の支援の情報収集に課題があることである。国際社会における医療の現状と課題の理解は、『医学教育モデル・コア・カリキュラム』⁶⁾の「国際社会への貢献」の項目に示されているものである。そのため、医学生が理解しなければならぬことであると考え。もう一つは、災害時に医療サービスを円滑に提供するために、平時から外国人医療について理解しておくことの重要性である。そのためには、患者の文化的背景を尊重し、異なる言語や価値観に対応した医療を提供するための素養を身に付けることが必要となる。これらを実践するためには、医学部のカリキュラムとして、大学全体で地域の在留外国人の診療や災害時の支援に関する学修を行う必要があると考える。

具体的には、災害医療に関する講義で、在留外国人への対応について取り上げ、地域医療に関する講義では、多文化共生社会に対応した医療サービスの提供についての議論、社会的な立場により不安に思うことに違いがあること、在

留資格により受けられる医療・福祉制度が異なることについての学修である。また、在留外国人や自治体と連携し、臨床実習に、平易な日本語を用いた診察や、多言語の間診票を用いた診察のシミュレーションについて、学修する必要があると考える。

終わりに

今回の調査は、岡山市、倉敷市、総社市と岡山県南の人口が集中している場所での実施であった。今後の課題は、県北など、人口動態の異なる地域における災害時の在留外国人の支援についての現状についても分析を行うことである。さらに、医師会などの岡山県内の組織において災害時に在留外国人に、どのように対応しているかについても調査していきたい。

謝 辞

本研究の調査にご協力くださった、岡山大学基幹教育センター非常勤講師の黒江理恵先生ならびに留学生の皆様、吉備国際大学社会科学部教授の井勝久喜先生ならびに留学生の皆様、倉敷日本語教室の田中温子先生、受講生の皆様ならびにボランティア教師の先生方、岡山市外国人議事会の皆様、総社市多文化共生推進員の譚俊偉様、倉敷市国際課の中桐訓子様、AMDA社会開発機構の竹久佳恵様、富岡洋子様、川崎医療福祉大学医療福祉学部教授の姜波先生に、謹んで感謝を申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、ご助言を頂戴した川崎医科大学語学所属長である福永仁夫学長に謝意を表します。

付 記

本稿は、第51回日本医学教育学会学術集会(2019年、京都)学生セッションでの発表内容に加筆したものである。なお、全著者について、本研究の開示すべき利益相反はない。

参考文献

- 1) 李節子：在日外国人の健康支援と医療通訳 誰一人取り残さないために. 東京, 杏林書院, 2018
- 2) <http://www.opief.or.jp/cms/wp-content/uploads/2018/03/f440ac79e0b858e01830a0198b9f7e9e.pdf> (2018.12.5)
- 3) 水田耀, 橋本美香, 長谷川真紀, 中野貴司, 田中孝明, Raphael Hawkins : 外国人患者が医療機関受診において経験するコミュニケーション・ギャップ. 川崎医学会誌一般教養篇 44: 39-48, 2018
- 4) 藤田さやか：日本に在住する外国人の災害への備えの認識と現状, 日本災害看護学会誌 19: 39-49, 2018
- 5) 小林米幸：医師・看護師必読 臨床 外国人外来対応マニュアル. 東京, ぱーそん書房, 2015, pp1-186
- 6) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/06/28/1383961_01.pdf (2018.12.11)

別紙1 質問紙

しきべつばんごう
識別番号：

しめい
氏名

しゅつしんこく
出身国

ぼご
母語

ざいりゅうがいこくじん さいがいじ ほけんいりょう ニーズおよび備えに関するアンケート

えら こと
選んだ答えをマークシートにマークしてください。

① あなた自身について (マークシート)

Q 1 にほん す ねんすう つぎ うち
日本に住んでいる年数は次の内どれですか。

1. 1年未満 2. 1年～3年未満 3. 3年～5年未満
4. 5年以上～10年未満 5. 10年以上

Q 2 おかやまけん す ねんすう すぎ うち
岡山県に住んでいる年数は次の内どれですか。

1. 1年未満 2. 1年～3年未満 3. 3年～5年未満
4. 5年以上～10年未満 5. 10年以上

Q 3 ざいりゅうしかく
在留資格はどれですか。

1. しゅうがく 2. しゅうろう 3. けんしゅう
4. にほんじん はいぐうしゃ 5. えいじゅうしゃ
4. 日本人の配偶者 5. 永住者

Q 4 けんこう ほけん はい
健康保険に入っていますか。

1. はい 2. いいえ

Q 5 にほんご き と
日本語は聞き取れますか。

1. き と 聞き取れない 2. あまり き と 聞き取れない 3. 少し き と 聞き取れる
4. き と 聞き取れる

Q 6 にほんご はな 日本語は話せますか。

1. はな 話せない 2. あまり はな 話せない 3. 少し はな 話せる 4. はな 話せる

Q 7 にほんご よ 日本語は読めますか。

1. よ 読めない 2. ひらがなはよ 読める 3. ひらがなとカタカナはよ 読める
4. しょきゅう かんじ 初級の漢字 5. ちゅうきゅういじょう かんじ 中級以上の漢字

Q 8 にほんごのうりよくしけん 日本語能力試験のレベルはどれですか。

1. J 5 2. J 4 3. J 3 4. J 2以上 5. わからない

Q 9 スマートフォンかタブレットを持っていますか。

1. はい 2. いいえ

Q 10 SNS (Social Networking Service) を使っていますか。(使っているものすべてをマークしてください。)

1. Facebook 2. Twitter 3. Instagram 4. その他
5. つかっていない

Q 11 普段、スマートフォンやタブレットで、翻訳アプリを使っていますか。

1. はい 2. いいえ

Q 12 医療通訳を使ったことはありますか。

1. はい 2. いいえ

Q 13 普段、保健医療に関する情報はどのようにして得ていますか。

1. SNS 2. テレビ 3. ラジオ 4. その他 5. えたことがない

② 災害について (マークシート)

Q14 普段、災害に関する情報はどのようにして得ていますか。

1. SNS 2. テレビ 3. ラジオ 4. その他 5. 得たことがない

Q15 災害時に相談できる病院はありますか。

1. ある 2. ない

Q16 災害時に、在留外国人が保健医療面でどのような支援を得られるか知っていますか。

1. はい 2. いいえ

Q17 岡山県が作った災害マニュアルがあるのを知っていますか。

1. はい 2. いいえ

Q18 岡山県内で、災害にあったことはありますか。

1. ある
2. ない (「ある」の場合、いつ、どのような災害か：)

Q19 岡山県以外の日本国内で、災害にあったことはありますか。

1. ある
2. ない (「ある」の場合、いつ、どのような災害か：)

③ 災害について (自由回答)

Q20 岡山県に住んでいて、災害時の保健医療面で不安に思うことは何ですか。

Q21 災害時の保健医療に関し、どのような情報が必要ですか。(例：母国語で受診できる医療機関に関する情報)。

Q22 被災した場合、保健医療面でどのような支援が必要だと思いますか。(例：ミルク、女性用の衛生用品)

Q23 母国にあって日本にない災害時の支援は何ですか。

Q24 災害で困ったことがある場合、保健医療面で困ったことは何ですか。

*ご協力ありがとうございました。いただきました回答を今後の医学研究に活かしていきたいとおもいます。

別紙2 インタビュー・ガイド

1. 普段、保健医療に関する情報をどのように得ているのか、詳しく聞かせてください。(質問紙のQ13に対応)
2. 普段、災害に関する情報をどのように得ているのか、詳しく聞かせてください。(質問紙のQ14に対応)
3. 災害時に、得られる保健医療面での支援について、知っていることを聞かせてください。(質問紙のQ16に対応)
4. 岡山県に住んでいて、災害時の保健医療面で不安に思うことは何か、詳しく聞かせてください。(質問紙のQ20に対応)
5. 被災した場合、保健医療面でどのような支援が必要だと思うか、詳しく聞かせてください。(質問紙のQ22に対応)
6. 被災したことがある場合、保健医療面で困ったことは何か、詳しく聞かせてください。(質問紙のQ24に対応)